

学位請求論文審査要旨

2011年12月14日

申請者 金子 幸代

論文題目 鷗外と近代劇（大東出版社 2011年3月20日刊）

論文審査委員 山崎 一穎

秋谷 治

古澤 ゆう子

1. 本論文の内容と構成

本論文は森鷗外の近代劇に関する文学活動について、ドイツでの観劇体験の足跡から帰国後の西欧近代劇の翻訳・紹介、創作、演劇改良への提言に至るまでを包括的にして且つ克明に解明したものである。森鷗外の近代劇に関する文学活動は彼自身においてもまた明治期の文学としてもその重要性が指摘されながらも小説や評論の研究に比べて研究が著しく遅れており、その解明は小説や評論、彼の思想とも絡みあい関連しているものであり、文学活動としても先行しているものであったのでその全体像の解明が待たれるものであった。とりわけドイツにおける観劇体験はその後の文学活動の出発点でありながらも鷗外『独逸日記』によるメモ他知ることができなかつたが、本研究において掘り起こされた資料によってその具体的実像・見聞した事柄が浮かび上がってきた。またそれらの実態が、その後の彼の西欧の近代劇の翻訳・紹介に繋がるのみならず、小説や評論の分野にも重要な影響を与え、その思想ことに女性問題・文学における女性像にも影響している原点・原体験であることを示すものとなっている。

森鷗外は帰国後すぐに日本演芸協会の文芸委員となり演劇改良について積極的な提言を行なう他、小説詩歌よりも逸早くドラマの翻訳により文壇復帰を果たし、『歌舞伎』誌・『スバル』誌の両輪により翻訳・紹介・創作を行ない、日本における近代劇の確立と啓蒙に大きな足跡を残し、多くの作家を啓発し刺激を与えた。又鷗外が関わった『歌舞伎』誌を中心にイプセン劇が日本の近代劇の確立発展にいかに関与したか、その女性雑誌における反響とともに論じ、更に鷗外の女性を主人公にした創作劇執筆に至る彼の女性論について、ドイツでの女性運動見聞及び帰国後の女性作家支援・海外の女性作家紹介等の活動について究明している。以上の内容を三部構成、第Ⅰ部「近代劇と邂逅」としてドイツ留学時代と近代劇との関わりをドイツの資料発掘紹介を中心にその足跡に則して考察し、第Ⅱ部「近代劇の創造」として演劇雑誌『歌舞伎』（明 33.1～大 4.1）と文芸雑誌『スバル』（明 42.1～大 2.12）を中心に考察し、第Ⅲ部「ノラの変容」として、イプセン劇の紹介上演とその反応、鷗外のそれらとの関わり及び彼の女性論を中心に考察した実証的な著作である（A5 版本文 424 頁、註 35 頁、索引他 29 頁）。

本論文は以下の各章から構成されている。

はじめに

I 近代劇との邂逅

序章 鷗外の留学と演劇

第一章 演劇・音楽・文学

- 一 留学最初の地
- 二 Theater<演劇体験について>
- 三 Faust in Leipzig

第二章 都市空間としてのライブツィヒ

- 一 町のランガーシュ
- 二 身体としての空間
- 三 遊戯としての空間
- 四 シンボルとしての駅
- 五 集中と安息
- 六 都市の個性

第三章 演劇都市・ドレスデン

- 一 ドレスデンの位置
- 二 ロオトとの交流
- 三 マドンナ
- 四 もう一人のエリスと『ファウスト』
- 五 『ファウスト』観劇

第四章 青春の都市・ミュンヘン—仕事と作品

《一》ミュンヘン時代の仕事—独文新資料

- 一 「麦酒の利尿作用」
- 二 劇場・「新設の照明及換気法の利害」に関する実験

《二》ミュンヘン時代の作品『うたかたの記』—伝承の水脈—

- 一 マリイ・巨勢・ルートヴィヒ二世の物語
- 二 土着の神々
- 三 狂婦の歌
- 四 伝承の水脈

第五章 管理都市・ベルリン—もう一つの『舞姫』

- 一 鷗外文学の源泉
- 二 ベルリンの光と影
- 三 眼だにあらば
- 四 『舞姫』のモデル

- 五 変遷する下宿
- 第六章 『ミカド』から「ドン・カルロス」へ
 - 一 喜歌劇『ミカド』
 - 二 鷗外の観劇体験
 - 三 劇場から俳優へ

II 近代劇の創造

第一章 帰国後の鷗外と演劇

- 一 演劇改良論争
- 二 『歌舞伎』と『スバル』

第二章 演劇雑誌と『歌舞伎』

- 一 新しい演劇総合雑誌
- 二 演劇への傾斜・明治二十年代
- 三 鷗外の翻訳戯曲
- 四 一幕物

第三章 最初の創作劇『玉篋兩浦嶼』

- 一 窓と障子
- 二 『玉篋兩浦嶼』の舞台
- 三 目でわかる脚本作り
- 四 メディアミックス

第四章 鷗外の翻訳劇

はじめに

- 一 ショルツ
- 二 シュニッツラー
- 三 若きウィーン派
- 四 ヴェデキント

おわり

第五章 劇の季節—文芸雑誌『スバル』の戯曲

- 一 『スバル』における戯曲の位置
- 二 鷗外の影響
- 三 ソルネスからヒルデへ

第六章 『スバル』の時代—鷗外と平出修—

はじめに

- 一 戯曲
- 二 戯曲紹介

- 三 小説
- 四 修の死と『スバル』の終刊
- 第七章 『スバル』創刊と創作劇『プルムウラ』**
 - 一 文壇復帰最初の創作劇
 - 二 姉の力・プルムウラが語るもの
 - 三 演劇の言葉の実験
 - 四 姉型ヒロインの誕生
- 第八章 対話劇『さへづり』—「椋鳥通信」から創作劇へ**
はじめに
 - 一 女性文化・情報の宝庫
 - 二 女性雑誌への反響
 - 三 『さへづり』の対話へ
- 第九章 鷗外の翻訳劇・創作劇上演年表**

III ノラの変容

- 第一章 イブセン劇と『歌舞伎』**
 - 一 俳優養成学校
 - 二 真の翻訳時代
 - 三 時間とのたたかい
 - 四 近代女優の誕生
- 第二章 ノラたちの戯曲—「青鞥」 「女子文壇」のノラ批評**
はじめに
 - 一 「女子文壇」における『人形の家』論
 - 二 「青鞥」の『人形の家』特集号
 - 三 女性問題の深化と広がり
- 第三章 日本のノラ—『人形の家』受容をめぐって**
プロローグ
 - 一 『人形の家』の位置
 - 二 イブセンの移入
 - 三 日本のノラ
 - 四 もう一人のノラ
 エピローグ
- 第四章 世界のノラ—「母性」からの解放**
 - 一 世界のノラ
 - 二 日本のノラ批評

三 イプセン劇の影響

おわりに

第五章 鷗外の女性論 —二十一世紀への架け橋

はじめに

一 鷗外のドイツ留学

二 ナウマン論争

三 帰国後の鷗外

四 女性文学の登場

五 新しい批評への道程

六 運命を切り拓く女性像

七 女性論の紹介

おわりに

2. 本論文の概要

第 I 部「近代劇との邂逅」では、鷗外の演劇活動が彼にとっても明治時代の文学においても日本近代文学においても極めて重要であったのにもかかわらず、その研究が遅れていることを指摘し、森鷗外が 1884 年（明 17）から 88 年（明 21）まで衛生学と陸軍医事の調査研究のためドイツに留学しライプツィヒ、ドレスデン、ミュンヘン及びベルリンに留学した時期に彼の『独逸日記』より知られる観劇体験について、逐一実地調査に基づき考察している。その全体の概要は主に『独逸日記』に記述のある上演日時などから上演題目・劇場・プログラム・ポスター・劇場の所在地と地図・上演を知った新聞とその広告や劇評の逐一を資料発掘により実証的に紹介、併せて当時の写真・調査時の写真を掲出する。鷗外に強い影響を与えた劇評家ロベルト・プレルスからの影響が通説の帰国後からのものでなく留学期からのものであったこと、戯曲のみの西洋演劇の関心影響に限られるものでなく、俳優（の演技力）・演出・劇場・脚本等総合的な関心を抱き、その経験が演劇として全体的なものであったことが考察され、日記の記述のあり方についても考察が及んでいる。

この他、第一章では、ライプツィヒにおいて新聞記事に触発されて劇場に出かけたこと、『ファウスト』由縁の地下酒場訪問の体験が後の訳語「窖」を生み出したこと、第二章では、都市の傍観者から身体全体で知覚する生活者へ変貌を遂げ、建物や公共空間の意味、庶民や知識人との交わり等鷗外の生の軌跡を追う。第三章では鷗外の願い出によって選びとった滞在地であるにもかかわらず、これまで調査されなかった地ドレスデンを解明し、軍医監ロオトとの交流の重要性を考察し、下宿地を確認、鷗外が見た『ファウスト』劇のパンフレット・劇場を確認し、5 ヶ月間に 7 回観劇をし（第六章）、新聞の劇評の重要性に気づいたこと（同）、その執筆者がロベルト・プレルスであることを明らかにし、彼からの影響が通説の帰国後のものでなくドレスデン滞在時の触発によるものであることを指摘する（同）。以て鷗外のその後の演劇活動に対する目が培われたのがドレスデン時代であったことを資料から明らかにし、ドレスデンでの体験の重要性を指摘する。

第四章では、ミュンヘンにおいて経験した医学実験（麦酒の利尿作用）の論文を発掘報告し、劇場の照明及換気の実験に立ち合っていた新聞記事によりその内容や鷗外の名を確認しドイツ人との交流、医学研究に照明をあてている。又、ルートヴィヒ二世の溺死事件に基づいて『うたかたの記』は描かれているが、鷗外が見た新聞の確認、ルートヴィヒ二世とともに溺死した侍医グッデンの作詩『狂婦の歌』を紹介し、この詩が「う

たかたの記」の背景にあることを指摘し、『うたかたの記』のマリイがシュタルンベルク湖の水の精であることをミュンヘンの伝承の水脈から考察し、新聞が新たな伝説を誕生させていることに気づいている鷗外像とその伝承の世界を『うたかたの記』が描いていることを考察する。

第五章では、佐藤春夫が鷗外のドイツ留学を「近代日本文学の紀元」と評価するのに準い、『独逸日記』を鷗外文学の源泉と見、『独逸日記』により考察、ベルリンの実地踏査確認をする。第六章では、第 I 部の総括をなす章として、ミュンヘンで観た喜歌劇『ミカド』の新聞資料・劇場確認その楽しみ方を考察、ライプツィヒからベルリンまでの地で見た劇場と演目の総括を行ない、新聞特にその劇評の重要性に鷗外が気づいたこと、劇場空間や俳優の重要性やその演技力の認識等が観劇経験を重ねてきたことによりなされ鑑識眼が培われていったことを考察、その後戯曲に生命を吹き込む俳優の重要性を説く帰国後の演劇改良運動や近代劇の翻訳実践に繋がったことが、ドイツでの観劇体験に基づくと説く。

第 II 部「近代劇の創造」では、帰国後の鷗外の演劇活動を、改良活動・劇の創作活動・翻訳及び紹介活動について第一章から第九章までに亘り詳述し、森鷗外における演劇活動の重要性・明治期におけるその重要性・及び近代文学におけるその重要性を鷗外の活動に則して、実証的に考察する。とりわけ演劇雑誌『歌舞伎』と文芸雑誌『スバル』から総合的に明瞭に浮かび上がらせた。

第一章では、帰国後、演劇改良運動に参加し劇場改造より戯曲の自立性を主張、第三木竹二編集の『歌舞伎』誌に翻訳戯曲を載せることで小説からでなく戯曲を手始めに文壇復帰を果たしたと指摘、以後 30 年間に 22 作の翻訳戯曲を掲載しその姿勢を重視する。第二章では『歌舞伎』が近代劇に果たした役割に注目し、劇評を定着させ、西洋戯曲紹介を初めその重要性和鷗外の業績を指摘する。第三章では、鷗外の最初の創作である詩劇『玉篋兩浦嶋』を同誌発行所から出版し科白に重きを置いた新しい演劇を提示し、史実に対する「歴史離れ」の文学観が小説の史伝物から始まったのでなく創作劇からであったと指摘、主だった文学者を招く観客動員まで図った姿勢や詩劇の先駆性とその影響を考察、近代劇評の確立に果たした鷗外の革新性を検討指摘する。第四章では近代劇に果たした鷗外の役割を『歌舞伎』に則して考察、ショルツ、シュニッツラー、ウィーン派、ヴェデキントの訳の検討から鷗外作品にも見られる意志的女性像を抽出、鷗外の小説への影響・醸成を考察する。第五章では、文芸誌『スバル』の創刊号に創作劇『プルムウラ』を載せたことを契機に次々に創作戯曲が載せられ、若い文学者が触発され劇や劇評を発表していた経緯を辿り、社会問題を反映した現代劇の掲載や啓蒙性を論じ、『スバル』誌が近代劇に果たした重要性和、『スバル』において戯曲がいかに重要な位置を示していたか指摘する。鷗外の近代劇発展に果たした役割として一幕物のスタイルの確立、戯曲の革新性、言葉の実験、新しいヒロイン像の創造にあると纏める。第六章では『スバル』を支援した平出修の役割を論じ、鷗外との関係を論じる。第七章では創作劇『プルムウラ』を検討し、歴史小説の姉型ヒロイン像の先駆けであり、既製の枠組みに把われない新しい戯曲であるとする。第八章では『スバル』に連載された「棕鳥通信」の役割を論じ、その西洋演劇他の動向の紹介が女性雑誌に情報を齎したこと、「さへぶり」が同じく新しい女性のあり方を伝えていたことを指摘する。第九章では鷗外の翻訳劇・創作劇の上演年表を詳細に纏め掲載する（30 頁分）。

第 III 部「ノラの変容」ではイプセン劇が日本の演劇、女性誌、女性解放運動に果たした役割と、鷗外の『ノラ』（『人形の家』）の意義、及び鷗外の女性論の先駆性・啓蒙性を論じる。

第一章では、近代劇の改良動向や、鷗外訳のイプセン劇『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』を小山内薫が上演し真の翻訳劇上演の時代に入ったこと、その動向、近代女優が誕生するに至ったことを検証する。第二章では、島村抱月訳『人形の家』公演を巡り、「女子文壇」誌・「青鞥」誌で論争が繰り広げられた動向を追い、女性問題の深化を考察する。第三章では、より広く文壇での受容を検証、抱月訳のノラが提起した問題点が

女性の問題に限られていたのに対して、鷗外訳『ノラ』は両性にまたがる人間全体の問題として訳されている違いを指摘し、その先駆性を考察、末尾に日本におけるイプセン翻訳年表を纏めている(11頁分)。第四章では、外国での『人形の家』の動勢を略述し、日本のノラの批評動向を略述、イプセン劇の影響を紹介する。第五章では、鷗外の女性像がこれまで保守的とされていたのに対し、近代的な女性観であることを本論文及び前著『鷗外と〈女性〉』(大東出版社 1992年)を踏まえて綜括する。ドイツ留学で女性解放運動に接したことを契機に、ナウマンとの論争において仏教における女性の地位が低いわけでない論駁し、帰国後の廃唱問題論争において廃止後の職業教育の必要性を説いていたこと、女性文学者としてより文学者「一詩人」として樋口一葉を高く評価した姿勢、海外女性作家の紹介、メーテルリンクの運命を切り開く女性像の紹介、ドイツの女性問題の動向の紹介等、1910年迄の鷗外の女性論の啓蒙性先駆的役割を追跡検討している。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の通りである。

第一に、再三の綿密な現地調査に基づき、ドイツ留学時代の鷗外の動向及びその意義に関して、従来鷗外自身による『独逸日記』に頼った研究しか試みられてこなかった研究状況に対して、鷗外の足跡を丹念に追求し、当時の新聞・雑誌を追求して鷗外が観た上演劇の紹介記事、劇評、広告や彼が参加した医学実験の報告記事・論文記事を掘り起こし、事実の確認検証及び紹介を行なったこと、当時の劇場・市街・建築物・下宿・滞在先等の確認と写真を発掘紹介したこと、劇場のポスターやパンフレット・地図等の資料の発掘紹介を逐一行ない、鷗外の体験の実態を実証的に追跡復元したことである。このことにより鷗外の見聞したものの意味が推測できることとなり、佐藤春夫が「鷗外森林太郎の洋行の事実を近代日本文学の紀元としたい」と称揚した評価の裏づけを行ない、とりわけ近代演劇の啓蒙と確立に結実していく源泉となったことを証明しえたことである。従来この点が未解明であったため鷗外と近代劇との関係も鷗外研究において注目度が低く、史伝文学等の高度の議論・研究に較べ遅れをとっていたが、その検討とともに鷗外文学全体への影響及び評価また近代文学におけるそれが改めて検証され直さなければならなくなったことである。

第二に、演劇雑誌『歌舞伎』と文芸雑誌『スバル』が両輪となって新しい演劇の紹介・創作・評論が活発化し、近代演劇の確立に向かって多大の役割を果たした意義を解明したことであり、鷗外の見聞の成果が具体的に活かされていく過程、その牽引者としての意義を再認識させ、鷗外が果たした多面的な演劇活動の重要性に改めて注目させたことである。

第三に女性解放運動の意義や新しい女性像の提起がドイツでの体験を契機に鷗外において啓発され、帰国後の啓蒙活動・支援になり、新しい女性像への関心が鷗外の文学や他の文学作品に結実していったことを解明したことである。

この他に細かな点においても多くの成果を指摘することができるが、敢えて特筆すべき重要点に絞り論評した。今後の森鷗外研究は、本論文によって解明された森鷗外と近代劇との関係を考慮することなくしては進められないことになったと評して過言ではなからう。

しかしながら、本論文に問題点がないわけではない。

第一に、折角掘り起こされた諸資料、ことに独文の新聞紙上の劇評の翻訳紹介が部分に止まり十分とはいえないことである。他の研究者が容易には参照することができない貴重な発掘資料でありドイツに点在している資料故、付録資料として更には翻訳付きで添付紹介すべきであった。さらに、こうした劇評が鷗外に与えた影響について、彼自身の戯曲論、劇評、ひいては文学作品と関連させての考察も必要である。目下のところ、資料の発見にとどまり、活用が不十分との印象を受ける。

第二に、例えば第二部第九章の「鷗外の翻訳劇・創作劇上演年表」の労作のごときは一覧表にして了とするに留まらず、その特色・傾向等の分析を加えるべきであり、画竜点睛を欠く感がある。また鷗外訳『ノラ』（『人形の家』）と島村抱月訳『人形の家』との相違を指摘しながら、その相違の因って来たる所の分析が実証的になされていない憾みがある。そうした隔靴搔痒の感を催させる箇所が数ヶ所散見する。もとよりそれらは瑣細な瑕瑾のことでしかない。

しかし、以上の点は本論文の欠点というよりも、第一の点については著者も認識しており、今後の課題として本論の補足の形で随時発表の意志を表明している。第二点の前者は年表としては完結しているものであり、後者は著者の前著『鷗外と〈女性〉』他に既に検討されているものであり、本論文のみを読む際に感じられる些少のことでしかない。今後の鷗外論は本論文を一瞥することなくしては論じられなくなったのである。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終試験結果の要旨

平成 23 年 11 月 17 日

論文審査担当者

山崎 一穎

秋谷 治

古澤 ゆう子

平成 23 年 11 月 16 日、学位請求論文提出者 金子 幸代氏の論文『鷗外と近代劇』に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、金子 幸代氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。また併せて課した外国語（独逸語）試験においても滞りなく適切な解答をなした。

よって、金子 幸代氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格と判定した。